

[K8] 外国人教師による経営学講義

(1)

日時	2018年7月27日
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・(A) 2年生の各グループで構成したビジネスプランの経営戦略・マーケティング戦略について、外国人の方の視点や考え方を取り入れること。 ・(B) 海外フィールドワークにおける英語での質疑応答の準備をすること。
対象	2年生 SGH 国際コース生徒
講師	ルイス・ブリチェット氏（オーストラリア）大学生 付波氏（中国）前筑波大学職員
授業内容	・海外フィールドワークで実施するビジネスプランプレゼンテーションのリハーサルとして、講師2名に対してプレゼンテーションを行い、質疑応答を行う。内容は、オリジナルのビジネスプランの経営戦略・マーケティング戦略とする。
評価	<p>・(A) 外国人の方の視点や考え方を取り入れること。A [根拠] 英語話者の方との質疑応答により、前提として共有される知識やイメージについて、生徒グループと共通する部分と共通していない部分を確認することができたため。</p> <p>・(B) 海外フィールドワークにおける英語での質疑応答の準備をすること。A [根拠] 頭の中で翻訳するのではなく、英語を使って考え話すという経験をすることができ、また、英語コミュニケーションを行う心構えを養うことができたため。</p>
課題	このような機会は、生徒の異文化コミュニケーションへのメタ認知を促し、また、日頃の英語学習にも大きなモチベーションとなる。本年度は1回飲みの実施であるが、継続的に複数回実施したい。

(2)

日時	2018年11月20日
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・(A) 1年生の各グループで構成したビジネスプランの経営戦略・マーケティング戦略について、専門性を持つ外国人講師の方にアドバイスをいただくこと。 ・(B) 英語を使用したコミュニケーションを楽しむこと。
対象	1年生
講師	サラ・モハメド氏（筑波大学大学院） パトリシア・サンボル氏（筑波大学大学院）
授業内容	・GBICでポスター発表するビジネスプランを発表し、フィードバックをえること。特に、ビジネスプランの経営戦略・マーケティング戦略について、経済系を専門とする講師の方に、具体的なアドバイスをいただく。
評価	<p>・(A) 専門性を持つ外国人講師の方にアドバイスをいただくこと。A [根拠] ほぼ独学に近かった経営やマーケティングなどの話題について、英語で分かりやすく教えて頂くことができた。事後アンケートに於いて、ほとんどの生徒は、自分たちのプランの具体的な改善点が分かったと答えた。</p> <p>・(B) 英語を使用したコミュニケーションを楽しむこと。A [根拠] 多くの生徒が、今年度で最も印象に残った機会として、この日の活動を挙げた。ふだんほとんど機会のない外国人とのコミュニケーションを、多くの生徒が楽しんでいた。</p>
課題	海外の方と直接、また、少人数でコミュニケーションをとれる貴重な機会であるため、英語科や地歴科など、他教科の教員と協働し、教科横断的な学びの機会としたい。

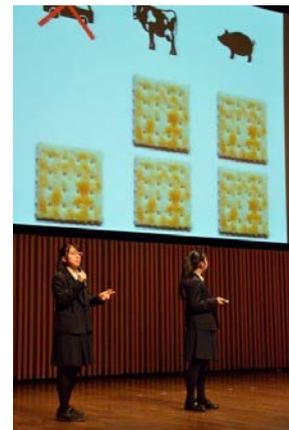
K9-1 統計学およびICT 機器活用授業

日 時	2018年10月～2019年2月
目 標	<p>情報ネットワークや、それを支える情報技術について理解すること。</p> <p>総合実習として、課題研究発表のためのまとめや分析などにコンピュータを利用できること。</p> <p>発表会のスライドや、レポートの作成ができるようになること。</p>
対 象	1年生 8クラス 320名
内 容	<p>国際の教科書を使用し、以下の技術を用いてレポートを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワード、エクセル、パワーポイントの使い方 ・電子メールの使い方 ・情報発信の方法 ・統計分析方法 ・情報リテラシー等 <p>上記に加え、同時編集機能をもつクラウドサービスを本年度から本格導入した。グループで作成するすべての提出物は、クラウド上での編集・提出とすることで、バージョン管理、Eメール送信、データ移動のコストをゼロにし、今までたびたび発生していたファイル滅失のリスクを避けることができた。今後、生徒が大学や就職先で触れるICT機器も、クラウドベース、同時編集ベースであると予測されるため、現時点での同機能への習熟は非常に価値が高いと考えられる。</p>
評 価	<p>1. ICT機器活用技能を習得する・情報社会の諸問題を理解する…A</p> <p>[根拠]実習への取組状況、発表会での客観評価・相互評価では目標の達成がじゅうぶんに認められたため。</p> <p>2. 統計分析の手法を理解する…B</p> <p>[根拠]教科書内の例文以上の発展的学習や実習的な活動を行うことができなかったため。</p>
課 題	統計分析の手法については、情報リテラシーの重要な観点であり、生徒の論理的思考力にも係わる重要な学習項目である。今年度は教材や時

間数の不足もあったが、次年度以降は、「社会と情報」の教科書を使用することも可能であり、生徒にとって身近な題材を使い学習する時間を確保することが期待される。



ポスター賞を受賞した作品



文字情報に頼らない、工夫されたスライド



統計データの分析などリテラシーが今後の課題

[K9-2] グローバルキャリア講演会

日時	2018年11月15日(木)
目標	(1)グローバルなキャリアの意識を高める。 (2)自らの長所を見つめなおし、活かせるようになる。
対象	全校生徒、保護者
講師	ザインエレクトロニクス株式会社 代表 飯塚哲哉氏
題名	「人を豊かにするフローの働き方～ベンチャーが面白い～」
内容	ザインエレクトロニクス株式会社代表の飯塚哲哉氏を講師に迎え、「人を豊かにするフローの働き方～ベンチャーが面白い～」という演題で講演をしていただいた。飯塚氏は本校の卒業生でもあり、半導体分野を中心に、世界的に活躍されてきた。飯塚氏は時代の流れを読み、ベンチャービジネス分野での起業を決意し、個とチームのフロー状態を目指す「人資豊燃」を創業精神に掲げ、会社を急成長させてきた。飯塚氏からは、「最も集中力が高く、能力が発揮され、深い満足感や癒やしを得られる無我の状態、そのフローの働き方を実践していくことが大切である。働き方は生き方である。」という考え方や、「課題が多くある現在の日本において、若い皆さんは起業家精神を持ってリスクを恐れずに、世界に学び、母国を豊かにして行ってほしい。」などのメッセージをいただいた。講演後は、生徒達から積極的に質問がされ、今後の生き方を考える貴重な時間となった。
評価	・グローバルなキャリアの意識を高める…A [根拠] 世界最先端の研究に触れ、その発想力や行動力に感銘を受けた生徒が多かったため。 ・自らの長所を見つめなおし、活かす…A [根拠] 闊達な質疑応答の様子から、高校での学習の重要性を全員が共有できたため。
課題	事前学習をしっかりと実施し、講師の方の研究内容をある程度知っていると、理解がより深まり、有意義な時間となる。



ベンチャーの魅力を伝える



生徒からの質問



生徒代表がお礼の言葉

[K9-3] グローカル企業・研究所訪問

日時	2018年11月22日(木)
目標	様々な職場や業務内容について事前に研究し、実際の訪問を通して、実社会の状況を自ら体験することにより、今後の進路選択の一助とする。
対象	1年生全員(320名)
内容	<p>以下の56の企業・研究所から、自らの課題意識をもとに訪問する事業所を選定する。</p> <p>筑波記念病院、物質材料研究機構、高エネルギー加速器研究機構、防災科学技術研究所、国土交通省国土地理院、株式会社ツムラ、google、創英国際特許法律事務所、ヤフー、テレビ朝日、東京証券取引所、日本放送協会(NHK)、博報堂、ベネッセコーポレーション、共同通信社、NTT情報ネットワーク総合研究所、大和証券、東京地方検察庁、講談社、日立建機、リクルートマーケティングパートナーズ、JTB、鹿島建設、大野・佐山法律事務所、国際協力機構JICA、WOWOW、総合不動産鑑定コンサルタント、有限責任あずさ監査法人、LINAX、東京新聞、キャノン、DeNA、日本IBM、経済産業省特許庁、三菱UFJ信託銀行、JR東日本開発機構、日本新薬、筑波メディカルセンター、筑波銀行、東京海上日動火災保険会社、クラレつくば研究センター、安藤・間 技術研究所、三菱ケミカル、最高裁判所、野村総合研究所、三菱商事、ザインエレクトロニクス、時事通信社、東京高等裁判所、日本テレビ、日本赤十字、アステラス製薬、東京上野税務署、文部科学省、Sony Music、理化学研究所、</p> <p>事前に訪問する事業所について詳しく調べ、冊子にまとめる。当日の見学を能動的に取り組めるよう、予め質問したいことを考えておく。</p>

生徒感想	<ul style="list-style-type: none"> ・企業というものは、ただ単に利潤をあげることだけを考えて動いているものと思っていたが、「プロフェッショナル」という言葉があるようになりかなり高度な社会貢献活動をしていることに驚いた。自分のビジネスプランにも取り入れたい。 ・仕事に「おもしろさ」というものが、自分が思った以上に、大切であることが分かった。また、知力、行動力、人脈力などの「力」を持つことは、物事をスムーズに運ぶためには必要だと感じた。 ・社員の人たちがゆったりと仕事ができる環境が整っていて、働きやすさにこだわっていることがよくわかった。 ・いろいろなことに挑戦する、という雰囲気満ち溢れている会社である。自由度高く、興味を持ったことに突き進む社風は、土浦一高生のあるべき姿と重なり、共感できる部分が多かった。
	 <p>検索だけではない Google</p>
評価	<p>実社会の状況を自ら体験することにより、今後の進路選択の一助とする…A</p> <p>[根拠]グローバル人材として社会の最前線で活躍する多くの本校卒業生の姿に触れ、自分たちのビジネスプランを進める際の心構えやヒントを得たという感想が多数あった。</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問で得たことを、各自の探究学習にどのようにかしていきたいかを明確に人に伝えられる指導。

[K9-4] キャリアガイダンス

日時	2019年2月23日(土) 13:35~15:30
目標	本校卒業生の職業体験の話しを聴くことで、職に就くことや、それまでのプロセスについてより現実のものとして考える。また大学・学部選択を見つめ直すとともに、自分の将来や学生として学ぶ意義、高校生として今やるべきことを考える。
対象	1年生全員(320名)
内容	土曜講座の午後、本校の卒業生16名をお招きして、クラスごとに講話をしてもらう。来校した先輩たちは社会人として、第一線で活躍している方たち。先輩たちの高校時代のエピソードもあり、温かい雰囲気の中での講話となる。
講師	現在の勤務先・職業 未来都市開発, 電通, ゴールドマン・サックス証券, 茨城西南医療センター病院, 土浦協働病院, KIRIN, ジャスネットコミュニケーションズ, 株式会社カラダノート, 三井住友銀行, 滋賀銀行, プリチストン, 全日本空輸, 山本・吉田法律事務所, EY 新日本有限責任監査法人, 豊島区役所, 特許庁
生徒感想	<ul style="list-style-type: none"> ・「医師の仕事は、一生勉強する必要があり、一生成長できる」というお話に感銘を受けた。医師に限らず、一生成長できる仕事に就きたいと思った。 ・私は今まで、世界で戦ううえで大切なものは、苦手がことをなくして完璧なオールラウンドな人間になることだと思っていた。しかし、先輩の話の「自分の得意な分野で戦う」という言葉で、自分が気づいていなかった新しい何かに気付かされた。 ・今日のガイダンスを通じて、資本主義社会における金融の担う重要性を痛感した。金融はこの資本主義経済の原点であり、高度で幅広い知識や技能が要求される。グローバルに活躍するためには、高校や大学時代にどれだ

	<p>け多くのことを学んで、将来のキャリアに生かせるかが大切になってくることを学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会社と学校は違うものだと思っていたが、共通点がたくさんあることに驚いた。自分に与えられたことだけをやっていただけでは、だれも評価してくれない。他人のために自分に何ができるのかを考え、先回りして待っていることが大切だと学びすぐに実践するつもりだ。 ・今取り組んでいる探究学習と、先輩方の話がとてもリンクしていた。ビジネスプランを考える際、駅前でフィールドワークを行ったが、商品を市場に出す前に、駅前で無料配布して反応を見るのは、フィールドワークと似ていると思った。 ・高校、大学、大学院、会社(仕事)はそれぞれ独立したものではなく、関連し合っていることが理解できた。自分が直面している課題を自分なりの結論を導けないと社会では通用しないということが理解できた。将来のことを考えることよりも、今やることをきちんとやろうと思った。 ・あまりにもすごい話をたくさん聞いたので消化していない。学校関連することは、勉強・部活動から友人との息抜きまで、一生懸命やらないといけないとことだけ分かった。 ・後輩のために仕事を休んでまで来校された先輩にただ感謝したい。将来、自分もここへきて後輩に語れるだけの人間になりたい。
評価	職に対して現実のものとして考える…A [根拠] 先輩の話に説得力があり実感がわいたとの感想が多かったため。
課題	予算措置が限られているため、講師の人数や日当が限られてしまう。

K9-5 キャリアセミナー

(1)1年生

日時	2018年11月2日(金)
目標	グローバル時代における勉学の意義を自ら考え、キャリア形成への行動を起こすきっかけとする。
会場	県南生涯学習センター
内容	東京大学准教授 仁平典宏氏
評価	勉学の意義を考える…A [根拠]先生の経験を交えたお話しに、多くの生徒が関心を持ち、講演後も質問する生徒が多数いたため。
課題	講演内容を精選し質疑応答の時間をもっと多くするとよい。

	[根拠] 事後に、学年から大学入試の説明を再度行ったが、質問等は皆無で、入試のしくみがよく分かったとようである。また、自分が受験生になった自覚をもつ生徒が増えたため。
課題	このタイミングで「合格体験記」の冊子を再度読み返す声かけも大切である。

(4)3年生 第1回

日時	2018年6月7日(木)
目標	進学先を固め、勉学のモチベーションを上げるきっかけとする。
会場	本校体育館
内容	駿台教育振興株式会社部長 吉田直史氏 演題「折れない心！一全では貴方のホンキ次第」
評価	勉学のモチベーションを上げる…A [根拠] 受験をターゲットにするのではなく、受験で学ぶ「折れない心」を上手に説明したので、直後の小テストはいつもより平均点が約1.3点高かったから。
課題	昨年同様、生徒の心に響く内容と話術をもった人を今後も人選する。

(2)2年生 第1回

日時	2018年6月14日(木)
目標	多面的な視点から進路選択を考える。
会場	本校体育館
内容	日本進路指導推進協議会会長、関東学院大学特任教授 山口和士氏 演題「これからの世界を拓く若き同志達へ」 2018版～未来に繋がる10の方針(2年次)
評価	多面的な視点から進路選択を考える…A [根拠] 真剣な態度で聞き、大きな刺激を受けたと語る生徒が多かったため。
課題	進路選択の意識調査を継続的に調査する一つの機会として、このような講演の直後にアンケート調査を実施するとよい。

(4)3年生 第2回

日時	2018年12月13日(木)
目標	受験生の仕上げとして、進路実現への強い思いを再確認する。
会場	本校体育館
内容	(株)ベネッセコーポレーションアセスメント開発部課長 奥田満氏 演題「集大成に向けて大切にしたい三つの約束」
評価	進路実現への強い思い…A [根拠] 熱心にメモを取る生徒が多かったため。
課題	今後も、この時期の受験生の心理を理解しつつ、叱咤激励できる人選を行う。

(3)2年生 第2回

日時	2018年12月13日(水)
目標	3年0学期を迎えるにあたり、文理コース選択を踏まえた、各自の目標と学習の目的を再確認し、目標の実現への強い意志をもつとともに、学習への士気を高める。
会場	県南生涯学習センター
内容	駿台教育振興株式会社部長 吉田直史氏 演題「折れない心！！一めさせ 難関大！！」
評価	大学入試の現状を知る…A

[G1] グローバル・リーダー養成キャンプ

2年生サマースクール

日 時	2018年8月27日(月)～29日(水)
場 所	ホテル&リゾート 南房総
参 加	1年生全員 引率教員 15名
目 標	(1)集団生活を通して土浦一高生としての帰属意識を高め、規範意識や社会性を養う。 (2)集団生活の中で人間関係づくりの支援をすることにより、学校生活の不安を解消する。 (3)自学自習の習慣を確認させ、自立探求型学習の推進を促す。 (4)進路決定を踏まえ、高校生活をどう生きるべきか、どうあるべきかを考える一助とする。
日 程	1日目 クラス別研修 2日目 自学自習、教養講座、特別講座 3日目 フィールドワーク実習
評 価	・規範意識や社会性…A [根拠] 生徒同士の注意によりルールが徹底されたため。 ・人間関係づくり…A [根拠] 友達通しの理解を深め、お互いに受け入れる姿勢ができたため。 ・自立探求型学習…A [根拠] 意欲を高くして学習に取り組めたため。 ・高校生活のあり方生き方…A [根拠] 担任との面談を通して進路目標を明確にできたため。
生 徒 感 想	[クラス別研修] ・友人の違った姿や別な一面を見ることができて楽しかった。 ・先生とも交流できたのはよかった。 ・クラス別に企画できるのは自由度が大きくよいと思う。 ・普段できないような体験ができて楽しかった。 ・本当の意味でリフレッシュできた。普段の生活でもこのような ON/OFF の切り替えができればうまく生活できるのではないかと感じた。 ・本当に心から笑えた。一高のメンバーでできた

からこそその楽しさがあった。

[自学自習、教養講座、特別講座]

- ・テスト前ということもありもっと勉強したかった。
- ・周りが頑張っていたので、自分自身もやる気が出て仲間と頑張れた。
- ・休憩時間が決められたのはよかった。
- ・休憩時間は自由でよいと思った。
- ・静かでよい環境だった。
- ・もう少し時間を増やしてもよい。
- ・先生への質問ができる場所を作ってほしかった。

[フィールドワーク実習]

- ・貴重な体験ができた。
- ・メンバーとインストラクターに恵まれた。
- ・友人との関係が深まった。
- ・最終日を楽しみに2日目の自習ががんばれた。
- ・やってみないとわからない楽しさがあった。
- ・みんなで協力して何かをすることの楽しさを改めて学んだ。



特別講座・・・悩むことは楽しい！

課 題

- ・学年によって実施の有無があるため、学校として統一して催行を検討することが望ましい。
- ・使用できる施設が限られており、プログラムの入れ替え等の工夫が必要である。

G2 外部機関主催リーダー研修会への参加

(1) 2018年度SGH全国高校生フォーラム

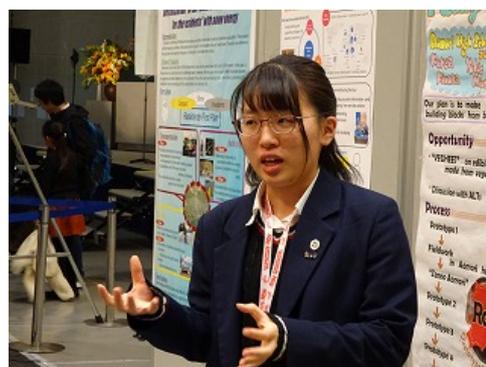
日時	2018年12月15日(土) 9:00~17:00
目標	(1) 全国の高校生や様々な専門家を前に研究成果を発表し、有益なフィードバックを得る。 (2) 他校の取り組みや研究成果を吸収し、自らの研究を深化させる学びとする
会場	東京国際フォーラム
参加者	・本校2年生3名 引率教員1名 ・他校SGH高校生・引率約1000名程度
進行及び生徒の動き	・生徒交流会 近い課題意識をもった生徒が集まってディスカッションする機会を通じて、それぞれの課題研究を深めるとともに、他校の生徒や留学生とつながり、テーマを通じたネットワークを作る等、今後の研究の糧となるきっかけづくりの良い機会である。また、テーマ別の小グループや全体でのディスカッションを通じて、グローバルな社会課題について英語で議論する力や積極性を養うことを目的とした。 本校生は、「農業・食料・食」の交流会に参加した。「農家の後継者問題」、「豊かな水と土壌の確保」、「食品ロス」、「気候変動への対応」と研究分野が多義にわたり、それぞれのグループの視点が多様で濃い議論ができた。山本梨央はグループを代表し英語で意見を述べた。校外で自分の意見を発表する機会を得たことに本人も大変満足そうであった。 ・ポスターセッション 食品ロスの問題を丹念に調べ上げ、海外フィールドワークの調査により内容に深みが増し、発表内容としては満足のいくものであった。同様の研究テーマがいくつかあり、オリジナル感が十分ださなかったのが残念な点であった。
生徒感想	・全国から一斉に各校の代表が集まる全国フォーラム。ディスカッションでは、似ているテーマの学校が集まり、その場で間について考え、そして英語で議論した。初めてあう人達と短時

間で打ち解け、意見をだし合うという機会はないかなかなかなく、そのような場で先導する力もまた必要であると感じた。ポスターセッションでは、英語、内容もちろん大切であるが、他の学校をみて、堂々とした態度もまた大切であると感じた。

・自信を持って、観客と視線を合わせてプレゼンをしたり、自ら観客に質問を求めにいったりする同級生の様子をポスターセッションの中で見た時、まだ自信をもつことや主体的であることができていると思いました。けれど、約1年前に筑波大で行われたフォーラムの時より、積極的に意見をのべよう、質問されたら何か返そうという意識を強く持つことができるようになっていて、これは初対面の人と自分の意見を交換し合うということを今までのSGHの活動で繰り返してきた成果だと思います。このことを実感することができたのは東京国際フォーラムという素晴らしい会場で全国から集まった高校生と沢山のことを共有できたからだと思います。このフォーラムのように同じ活動をする同年代と、交流できるのはとても貴重で有意義なことだと思いました。(山本)

評価 有益なフィードバックを得、研究を深化する…
A [根拠] 他校の高校生と積極的に交流し、刺激を受けたと語ったため。

課題 観客としても参加する生徒を増やせるとよい。

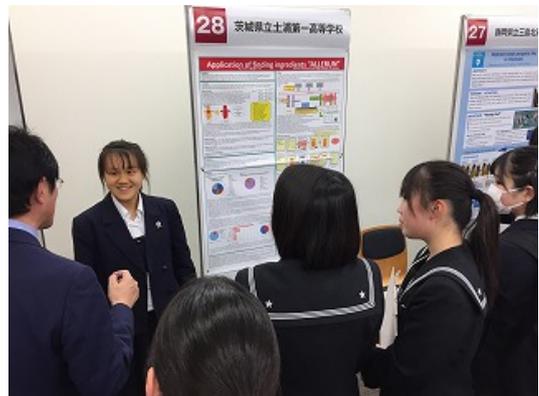


審査員や聴衆を前に英語でポスタープレゼン

(2) 関東甲信越静地区SGH課題研究発表会

日時	2018年12月23日(日) 10:00~17:00
目標	(1) 全国の高校生や様々な専門家を前に研究成果を発表し、有益なフィードバックを得る。 (2) 他校の取り組みや研究成果を吸収し、自らの研究を深化させる学びとする。
会場	立教大学池袋キャンパス
参加者	・本校2年生 22名 引率教員 1名 ・他校SGH高校生・引率 300名程度 ・立教大学教員(審査員) ・一般参加者 100名程度
進行及び生徒の動き	本校は、プレゼンテーション部門で4チーム、ポスター部門で2チーム参加した。受賞等はなかったが、生徒たちは他SGH校生とのハイレベルな関わりに刺激を受けながらも楽しく交流し、有意義な機会となった。
生徒感想	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家の先生たちの質問が鋭く、十分な返答ができなかった。別のグループの発表を聞いていた時、別の先生が、先ほど私たちにしたのと同じ質問をそのグループにしていたが、上手に返答しているのを聞いて、自分の不甲斐なさを実感した。自分たちのビジネスプランを説明するのではなく、客観的データを用いて売り込む必要性を感じた。 ・流ちょうな英語でプレゼンを行っているグループがあり驚いたが、内容があまりわからなかった。別のグループは、大きな声でジェスチャーを交えながら、抑揚をつけて語りかけており大変分かりやすかった。 ・ここに参加してくる高校生のレベルが高いと思った。英語の発表にちゃんと耳を傾け質問をしてくれる、また、積極的にアドバイスもしてくれて来てよかったと思った。 ・想定問答集を準備してプレゼンに臨んでいるグループがいくつもあり、ディベートの授業準備と同じだと思った。ポスターは、印象に残るように工夫がされていて、小道具も重要なアイテムだと思った。 ・ある程度準備をしておいたので、質問に対し

	<p>てもスムーズに答えられた。何人かのひとに上手だと言われ素直にうれしかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちと同じテーマであるが、提案を裏付けるデータが複数あり説得力があった。多角的にもものを見る重要性がよくわかった。 ・プレゼンする際に、配布資料(補助資料)を用意しているグループがあった。伝えたい内容をコンパクトにまとめてあり、後で読み返すことができる点が良いと思った。
評価	<p>課題研究を深化する…A</p> <p>[根拠] 入賞こそ逃したが、ある程度の準備をして発表に臨めた、また、他校の生徒・関係者と積極的に意見交換をしていたため。</p>
課題	<p>日曜日でもあり、多くのプレゼンターが参加できたのはよかったが、せっかくの機会なので、もっと多くの生徒を聴衆として参加させる方法を考えることが課題である。</p>



アレルギー発見アプリの提案



トレーニングの情報化の考察

第5章

効果と評価

SGH 研究開発第5年次の研究主題は「グローバル・リーダー育成プログラムの普及に関する研究」であり、ビジネス界への起業提案によるベンチャー企業との連携の完成をめざした。そのためには、課題解決能力、人的ネットワーク、コミュニケーション能力など、多くの能力が必要である。これらの能力は、「グローバル・リーダーの資質」（下の表）に適合する。したがってグローバル・リーダーを育成するためにはその資質を向上させ、高校生がベンチャー企業と連携の完成が有効ではないか。このような背景で、第5年次の研究主題を設定した。

【グローバル・リーダー育成のための教育】

[K1] 課題探求活動の取り組み	[K9-1] 統計学およびICT 機器活用授業
[K2] 筑波大学教員による講義	[K9-2] グローバルキャリア講演会
[K3] 筑波大留学生とのブース・ワークショップ	[K9-3] グローバル企業・研究所訪問
[K4] 海外大学との連携による課題研究テーマの深化	[K9-4] キャリアガイダンス
[K5] 筑波大学・筑波銀行との連携による起業教育プログラム	[K9-5] キャリアセミナー
[K6] 海外高校との連携による課題研究テーマに関する意見交換および研究発表	[G1] グローバル・リーダー養成キャンプ
[K7] 課題研究のための海外フィールドワーク	[G2] リーダー研修会への参加
[K8] 外国人講師による経営学講義	

【グローバル・リーダーの資質】

- ア 多様な好奇心で、自ら物事を探り究める力
- イ 明確な信念に基づく決断力
- ウ 自らの判断を的確に表現するプレゼン能力
- エ 世界の諸課題に対する幅広い関心と深い理解力
- オ 日本の「和」の精神を持ちながら、様々な価値観を持つ人と渡り合えるコミュニケーション能力

上にあげた【グローバル・リーダー育成のための教育】（[K1]～[G2]）を行うことで、【グローバル・リーダーの資質】（ア～オ）は、研究開発第1年次～4年次における検証で、本校の描くグローバル・リーダー像「世界の仕組みを理解し、課題を見つけ、他者の立場を尊重し、解決に導く決断ができる人」を具現化したものとして適切であると確認できている。そこで本年は、この【教育】と【資質】が、仮説1～仮説5にどのように関わったかを、可能な限り客観的に評価することを試みる。

仮説1

筑波大学教員による講義や筑波大学留学生とのブース・ワークショップなどの知的交流に積極的に取り組み、現実の中から本質的な問題を発見、独創的な形で課題を設定し、その課題に対し自ら探究できる思考力・技能を身につけることができるだろう。

実践

グローバル・リーダー育成のための教育	対象					最も身につく資質
	1年生全員	2年生全員	2年生 SGH 国際コース	3年生全員	3年生 SGH 国際コース	
[K1]	○		○		○	ア 多様な好奇心で、自ら物事を探り究
[K2]			○			
[K3]	○					

[K4]			○			める力
------	--	--	---	--	--	-----

評価

- 1 現実の中から本質的な問題を発見し、独創的な形で課題を設定した。
 - (1) 昨年度より、問題解決につながるビジネスプランの提案が多くより具体的であるから。(本報告書生徒成果報告、第4年次報告書生徒成果報告参照)
 - (2) 留学生から指摘を受け新たな課題がわかったことや別の見方を考察に加えたことが、振り返りシートや研究論文に記載されているから(第4章 [K3], 生徒成果報告参照)。
- 2 課題に対し自ら探究できる思考力・技能を身につけることができた。
 - (1) 他校生徒との活動を通じて、機器の使用方法を学び、自分たちの探究学習に活用したから(第4章 [K1] 参照)。
 - (2) 海外フィールドワーク3方面すべてにホームステイを実施することで、現実の問題点を直接体験し、その解決法を探し出そうとする様子が、生徒感想や研究論文に記載されているから(第4章 [K4], 生徒成果報告参照)。

仮説2

筑波大学・筑波銀行との連携による起業教育プログラムや海外高校とのディスカッションなど、学校外の多くの人と積極的に関わる経験を積み、国際的に働いたり、グローバル企業の起業を考えたりする際に不可欠な人的ネットワーク構築術を身につけることができるだろう。

実践

グローバル・リーダー育成のための教育	対 象					最も身につく資質
	1年生全員	2年生全員	2年生 SGH 国際コース	3年生全員	3年生 SGH 国際コース	
[K5]	○		○			イ 明確な信念に基づく決断力
[K6]			○			
[K7]			○			

評価

国際的に働いたり、グローバル企業の起業を考えたりする際に不可欠な人的ネットワーク構築術を身につけることができた。

- (1) 目標設定シート中の下記の項目は、平成26年度よりすべて上昇しているから。

項目	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
課題研究に関する国外の研修参加者数	0人	40人	35人	30人	26人
課題研究に関する国内の研修参加者数	12人	40人	37人	32人	26人
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	0校	3校	4校	5校	5校
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数	10人	21人	34人	40人	36人
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数	4人	9人	13人	13人	13人
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	8人	10人	11人	20人	26人

- (2) 1年間で探究学習に何人の校外の人たちがかかわったか、のアンケート結果によると、一般生徒が8.0人に対し、

SGH 生徒は 14.1 人だったから。

(3) 実際にグローバル企業で働き、国際的に活躍しているの方々にお話を伺う機会では、関連な質疑応答や連絡先の交換が行われているのから (第4章 [K5] 参照)。

仮説3

外国人講師による経営学講義や、専門家による統計学・ICT 機器活用授業などの各種学習・研修に積極的に取り組めば、あらゆる分野での職務に必要なグローバルキャリアスキルを身につけることができるだろう。

実践

グローバル・リーダー育成のための教育	対 象					最も身につく資質
	1年生全員	2年生全員	2年生 SGH 国際コース	3年生全員	3年生 SGH 国際コース	
[K8]	○					ウ 自らの判断を的確に表現するプレゼン能力
[K9-1]	○					

評価

あらゆる分野での職務に必要なグローバルキャリアスキルを身につけることができた。

(1) 本校で作成した「国際」の教科書を使用して、ワード・エクセル・パワーポイント・電子メールの使い方、情報発信・統計分析の方法、情報リテラシー等を学ぶから。([K9-1] 参照)

入学時、文字入力に関しては100%の生徒が行えるが、レポート作成をワード行うことができる生徒は全体の約60%、エクセルを使用してデータ集計ができるのは約20%、パワーポイントでプレゼン資料が作ることができるのは約10%であった。また、情報発信・統計分析の方法や情報リテラシーに関してはよくわからないと答える生徒が多い状況だったが、1月には90%以上の生徒がスキルを身につけた。(第4章 [K9-1] 参照)

(2) 外国人講師と、英語を使ってコミュニケーションをとりながら探究活動を行い、英語を使ってポスター発表を行った班もいたから (第4章 [K8] 参照)。

仮説4

グローバルに活動する企業・研究所の訪問や、グローバルに働く本校卒業生と直に接するなど各種のグローバルキャリア養成プログラムに主体的に参加すれば、グローバルな場で活躍するために基礎となる幅広い視野を身につけることができるだろう。

実践

グローバル・リーダー育成のための教育	対 象					最も身につく資質
	1年生全員	2年生全員	2年生 SGH 国際コース	3年生全員	3年生 SGH 国際コース	
[K9-2]	○	○		○		エ 世界の諸課題に対する幅広い関心と深い理解力
[K9-3]	○					
[K9-4]	○					
[K9-5]	○					

評価

グローバルな場で活躍するために基礎となる幅広い視野を身につけることができた。

- (1) グローバルに活動する企業・研究所を訪問後、学んだ内容をもとに、ほとんどのグループが自分たちのビジネスプランを再考するために、放課後、図書館やパソコン室を利用した。普段の利用率は20%程度であるが、この時期は70%を超え、曜日によっては使えない状況があったから（第4章 [K9-3] 参照）。
- (2) 生徒アンケートの中で、専門分野が明確化したと答えた生徒の割合が、年度当初は28.0%であったが、年度末には42.0%となったから。（第6章参照）

仮説5

海外の高校生との研究ディスカッションや、リーダー育成を目的とした「グローバル・リーダー養成キャンプ」などのチーム活動を意識した行事に能動的に取り組めば、協調精神および多様な価値観を有する他者とのコミュニケーション能力を身につけることができるだろう。

実践

グローバル・ リーダー育成 のための教育	対 象					最も身につく 資質
	1年生全員	2年生全員	2年生 SGH 国際コース	3年生全員	3年生 SGH 国際コース	
[G1]		○				オ 日本の「和」 の精神を持ちなが ら、様々な価値 観を持つ人と 渡り合えるコミ ュニケーション 能力
[G2]			○			

評価

協調精神および多様な価値観を有する他者とのコミュニケーション能力を身につけることができた。

- (1) GTEC for STUDENT の得点で、一般生徒が1年間で56.4点上昇しているのに対し、SGH生徒は63.8点上昇しているから。
- (2) 生徒アンケートの中で、1年間に外国人と会話した人数が、一般生徒が4.9人なのに対し、SGH生徒は16.0人だから。（第6章参照）

今後の方向と成果の普及について、目標設定シートの分析をしながら記述する。

1 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）の分析

・項目 a 「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」は増加した。年ごとに順調に増加している。ボランティア活動で県高 P 連から表彰された生徒の事例を共有するなど目標が達成できるよう努力してきた。本校にとって SGH は、有志や部活動単位での活動がますます推奨されるしきりかきとなった。

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値
SGH 生	26人	27人	31人	32人	40人	40人
SGH 以外	14人	12人	46人	53人	55人	100人

<今後の方向・成果の普及>

SGH のような探究学習活動が、有効であることが証明されたので今後も推奨していきたい。目標値 100 人に達していないため、社会貢献活動等に参加しやすいよう、考査終了後の 1 週間を「社会貢献活動ウィーク」にして、学校を上げて取り組むよう提言したい。また、夏季休業中に、近隣の学校と合同で行なう等の工夫をし、探究学習やフィールドワークと社会貢献活動の関連を説明し普及させたい。

・項目 b 「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」は横ばいであり、当初の目標には達していない。「トビタテ！留学 JAPAN」の問い合わせは年々増加してはいるが、実際申し込むまでには至っていない。海外留学経験や海外在住経験のある両親が比較的多い学校ではあるが、海外留学は大学在学中でも良い、と考えている保護者が多いことが、保護者面談時の聞き取りで判明した。引き続き啓発活動は行う予定である。

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値
SGH 生	0人	0人	0人	1人	0人	40人
SGH 以外	3人	2人	2人	0人	1人	8人

<今後の方向・成果の普及>

目標値に達していないため、新入生の保護者全員に「トビタテ！留学 JAPAN」を配布し、海外留学は特別なことではなく、費用の面がクリアできれば素晴らしい体験が待っていることを伝える予定である。また、PTA 面談前に、ホームステイ受け入れ経験家庭の体験談を聞く機会を設け、外国人と生活する上での不安を解消する機会を設け、短期留学から実施を促したい。

・項目 c 「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合」は増加した。今年度は 1 年生授業「グローバルキャリアデザイン」で、ビジネスアイデアの提案を計画的に行い、飯塚哲哉先生（豊人・ザインエレクトロニクス代表、本校 18 回卒）に来校いただき、起業家としての夢を語っていただいた結果、探究活動が活性化し意識高揚につながったと思われる。

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値
SGH 生	62.3%	91.4%	91.9%	73.7%	85.0%	80%
SGH 以外	60.0%	70.0%	56.3%	51.4%	66.0%	66%

<今後の方向・成果の普及>

グローバルキャリア講演会は今後も実施されるが、5 年間の取組で、「今が旬」な人ではなく、「これら

ら旬」な人に依頼した方が生徒の反応が良いことが、生徒の感想からわかった。来年度の講師選択は、生徒の意見を取り入れ行うことを、4月の職員会議に提案する予定である。

・項目 d 「公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数」は減少し、今年度、対象者はいなかった。本校も大会発表のノウハウが蓄積されてきたが、それ以上に、全国的にレベルが上がっていると感じた。発表会に参加して思うことは、優れた発表は、自分たちの主張が客観的データに支持され、平易な英語で語られていることである。来年度以降の探究学習に反映させたい。

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値
SGH 生	0人	0人	12人	4人	0人	10人
SGH 以外	0人	2人	0人	1人	0人	5人

<今後の方向・成果の普及>

全国大会や関東大会への出場は可能であるが、客観的データ不足とプレゼンの練習不足で入賞まで届かない。今年度から、SSH 校である、茨城県立竜ヶ崎第一高等学校と連携し、類似分野におけるデータと客観的データ算出方法の共有をお願いした。来年度は4月に方針を決定し、6月の発表会でどの分野を共有するかを検討してから、夏のフィールドワークを行う予定である。英語プレゼンに関しては蓄積があるので、近隣中学校に対し、8月に行われるインタラクティブフォーラム予選の指導を行うなど普及活動を推進する。

・項目 e 「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力として CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合」は増加した。SGH 指定前よりは確実に増加しているが、年による増減が大きい。目標値達成とはならなかったが、5年前に比べると CEFR に対応する資格試験が多様化しているのが気になる。1回の受検料が1万円を超える試験もあり、複数回の受検は不可能であり財政的支援が必要である。

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値
SGH 生	12.0%	12.2%	50.0%	18.9%	28.1%	100%
SGH 以外	12.0%	12.2%	18.1%	19.1%	30.0%	80%

<今後の方向・成果の普及>

今後も GTEC を用いて生徒の英語力の推移観察をしていくが、大学入試の英語外部試験導入を踏まえ、はっきりした方向を示せない部分もある。英語力は確実に伸びてはいるが目標値には届いていない。GTEC の実施時期を含め4月には検討予定である。なお成果の普及は学校訪問時に行っている。

2 指定4年目以降に検証する成果目標の分析

・項目 a 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒数の推移

<タイプ A>

	26年度入試	27年度入試	28年度入試	29年度入試	30年度入試
北海道大学	2人	2人	8人	9人	7人
東北大学	11人	11人	6人	18人	9人
筑波大学	33人	40人	37人	27人	25人
東京医科歯科大学	1人	1人	1人	1人	2人
東京工業大学	0人	1人	0人	3人	0人

名古屋大学	1人	3人	0人	1人	4人
京都大学	1人	5人	1人	5人	7人
大阪大学	1人	3人	2人	3人	6人
広島大学	0人	1人	0人	0人	1人
九州大学	1人	0人	0人	1人	0人
慶應義塾大学	8人	7人	2人	2人	7人
早稲田大学	4人	4人	10人	4人	8人
合計	63人	78人	67人	74人	76人
新卒者割合 (%)	20.2%	24.8%	21.1%	23.6%	24.4%

<参考>

	26年度入試	27年度入試	28年度入試	29年度入試	30年度入試
新卒者数	312人	315人	317人	313人	311人
タイプ A 合格者延 べ数	80人	114人	93人	103人	94人
タイプ B 合格者延 べ数	87人	92人	91人	86人	82人
進学準備等人数	159人	119人	155人	145人	146人
タイプ A+B 新卒者 割合 (%)	53.5%	65.4%	58.0%	60.4%	56.6%
進学準備等割合 (%)	51.0%	37.8%	48.9%	46.3%	46.9%

・項目 b 海外大学へ進学する生徒の人数

	24年度	25年度	29年度	30年度	目標値 (33年度)
SGH 生			0人	0人	6人
SGH 以外	1人	0人	0人	0人	3人

・項目 c SGH での課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合

	24年度	25年度	29年度	30年度	目標値 (33年度)
SGH 生			70.1%	50.0%	80%
SGH 以外			47.3%	45.0%	50%

・項目 d 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数

	24年度	25年度	29年度	30年度	目標値 (33年度)
SGH 生			2人	2人	40人
SGH 以外			14	0人	100人

<今後の方向・成果の普及>

進路先を把握した中では、約 50%の生徒が、国際化に重点を置く大学へ進学しているが、海外の大学への

進学者はあまり見られない。子息に海外大学を勧めたい保護者はまだ少数ではあるが、子どもの意思を尊重する親が多いことから、生徒本人さえ海外大学への希望を持てば海外進学が実現する環境にある生徒が多いと考えている。「トビタテ！留学 JAPAN」を保護者に直接アプローチするなどの取り組みが大切と考えている。今年度、専攻に影響を与えると回答した生徒は半数であった。また、卒業生への聞き取り調査は直接行ったが、人数が限られてしまう。今後は、SNSの集計ソフトを利用し行うなどの工夫が必要である。

3 グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）の分析

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	人	0人	0人	40人	35人	30人	26人	30人
目標設定の考え方: 0人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、30人とする。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	人	0人	12人	40人	37人	32人	26人	40人
目標設定の考え方: 0人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、40人とする。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	校	0校	0校	3校	4校	5校	5校	5校
目標設定の考え方: 0(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、5校とする。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	人	0人	10人	21人	34人	40人	36人	80人
目標設定の考え方: 0人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、80人とする。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	人	0人	4人	9人	13人	13人	13人	80人
目標設定の考え方: 0人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、80人とする。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	2人	6人	8人	10人	11人	20人	26人	40人
目標設定の考え方: 6人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、40人とする。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	人	10人	11人	8人	0人	0人	10人	20人
目標設定の考え方: 10人(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、20人とする。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	0回	1回	2回	3回	4回	3回	10回
目標設定の考え方: 0(25年度)から始め、年次的に増加させ、終了年次には、10回とする。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i		×	△	○	○	○	○	○
目標設定の考え方: 26年度は一部整備。その他未整備については27年度に対応する。								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方:								

<今後の方向・成果の普及>

SGHプログラムを受けた生徒は、本年度で3回目の卒業となった。5年前に定めた目標値に届いていない項目が多く反省点である。学校行事や部活動大会等と日程が被っているために、国外研修参加者が減少している(a, b)が、どの項目も目標値に近づきつつある。また、来年度から医学コースが新設されることになり、人的支援を受けながら、医療関係の探究学習がますます深化すると思われる。さらに、2021年度には附属中学校が開校する。探究学習を長期視点で捉え9項目の続伸を目指したい。

● 関係資料1 運営指導委員会記録

第1回運営指導委員会

名簿	<p>(1)運営指導委員</p> <p>西成 活裕 東京大学教授 石隈 利紀 東京成徳大学教授, 筑波大学名誉教授</p> <p>幡谷 浩史 茨城トヨタ自動車株式会社社長 豊崎 利明 茨城県立土浦第一高等学校教諭 井坂 隆 土浦市教育委員会教育長 武井 秀一 元茨城県立土浦第一高等学校校長 山根 爽一 茨城県生物多様性センター所長 渡邊 慎一 日本電子株式会社顧問</p> <p>(2)オブザーバー</p> <p>関 正樹 関彰商事株式会社代表取締役社長 渡辺 一洋 筑波銀行常務執行役員営業副本部長</p> <p>(3)管理機関 教育庁</p> <p>石井 純一 学校教育部高校教育課長</p> <p>塚田 歩 学校教育部高校教育課指導担当指導主事</p> <p>(4)本校職員</p> <p>杉田 幸雄 校長 明賀 靖子 副校長 片岡 達郎 教頭 荒木 克義 副参事兼事務室長 ほか本校 SGH 推進室職員</p>
日時	2018年9月20日(木) 14:30~17:15
場所	県立土浦第一高等学校 会議室
日程内容	<p>(1)授業見学 グローバルキャリアデザイン (2)授業見学 グローバルキャリアアドバンス (3)運営指導委員会協議 16:30~17:15</p> <p>①委員長等選出 委員長に西成活裕教授, 副委員長に石隈利紀教授を選出する。</p> <p>②平成30年度前期事業報告</p> <p>③協議 各委員からのコメントおよび質疑応答</p>
意見	<p>・探究学習とは, 課題を見つけ調べるのではなく, 「世界の仕組みを理解し他者の立場を尊重し解決に導くこと」であり, 土浦一高グローバルリーダー像と重なる。</p> <p>・多様なテーマがあるのもよいが, 一つのテーマを継続して研究していく仕組みができあがるとよい。</p> <p>・ビジネスという視点から見ると, うまくいかない場合, 別の方向に転換することは良くあるが, 探究学習であれば突き詰めて考える必要がある。ビジネスの柔</p>

軟さと探究の強硬さを併せ持つてほしい。

- ・プレゼンテーションは年々上手になっている。短い言葉で適切に相手に伝える手法をさらに学んでほしい。
- ・これほどインターネットが普及し, どれくらいの生徒が新聞を読んでいるか? 社説・コラム欄はいつの時代もその世相を反映している。そのようなところにもその時代の「課題」が発見できると思う。
- ・土浦一高は筑波大学と連携協定を結んでいるが, 教授の講演, 夏のフィールドワーク実習, 留学生とのワークショップ以外にもっとつながりを持ち, 高大連携を進めてほしい。
- ・真鍋小学校や笠間高校とコラボしていることは非常に面白い企画である。他校との連携の成功例としてもっとアピールしても良いと思う。
- ・生徒の探究学習にまだ稚拙な面が見られる。更なる適切な指導を期待したい。
- ・海外フィールドワークの成果は理解できるが, もっと学べるところがある。自分の探究分野以外にも興味関心を持つとよい。
- ・来年度以降はどのようにするのか? 同様の計画は文科省では提示する予定があるのか? 継続して行えるよう管理機関に早めに相談する事が必要である。



「グローバルキャリアデザインアドバンス」授業



運営指導委員会の様子

第2回運営指導委員会

名簿	<p>(1)運営指導委員</p> <p>西成 活裕 東京大学教授 石隈 利紀 東京成徳大学教授, 筑波大学名誉教授 幡谷 浩史 茨城トヨタ自動車株式会社社長 豊崎 利明 茨城県立戸第一高等学校教諭 井坂 隆 土浦市教育委員会教育長 武井 秀一 元茨城県立土浦第一高等学校校長 山根 爽一 茨城県生物多様性センター所長 渡邊 慎一 日本電子株式会社顧問</p> <p>(2)オブザーバー</p> <p>関 正樹 関彰商事株式会社代表取締役社長 渡辺 一洋 筑波銀行常務執行役員営業副本部長</p> <p>(3)管理機関 教育庁</p> <p>石井 純一 学校教育部高校教育課長 塚田 歩 学校教育部高校教育課指導担当指導主事</p> <p>(4)本校職員</p> <p>杉田 幸雄 校長 明賀 靖子 副校長 片岡 達郎 教頭 荒木 克義 副参事兼事務室長 ほか本校 SGH 推進室職員</p>
日時	2019年1月26日(日) 16:20~17:00
場所	つくば国際会議場
日程内容	<p>(1)第5回グローバルビジネスアイデアコンテスト参加 (2)運営指導委員よりコメント・指導 (3)質疑応答</p>
意見	<p>☆グローバルビジネスアイデアコンテストについて</p> <p>・年々良くなってきているので来年度以降も継続してほしい。生徒の成長が見取れる貴重なコンテストである。</p> <p>・皆で協力しながら行った SGH を発展させ、集合体(コンソーシアム)を作って協力する新しい SGH を目指してほしい。</p> <p>・卒業生によるパネルディスカッションがよかった。SGH が始まった当初は研究内容に疑問を持ち不安を感じたこともあったが、卒業生の話を聞くと、在学時代の経験を前向きに反省し、現在の生活の一部としていところが素晴らしい。</p> <p>・パネルディスカッションの司会者(2年生)は大変上手である。最後の結論に向かい、パネラーの発言を上手にまとめ上げている点が出色である。</p>

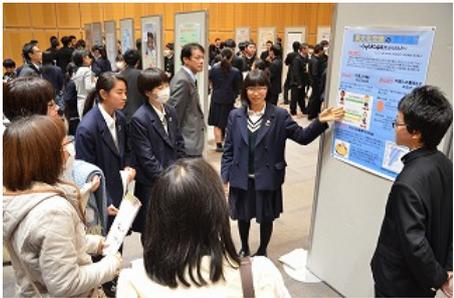
- ・京都市立堀川高校のSSHの発表を見た。発表の多くが生徒の好奇心に端を発している。教職員は生徒が自然に好奇心を持つ環境を整えたい。
- ・プレゼンテーションの多くが、ベンチャーの「ピッチ」レベルまで到達している印象を受けた。今後も協力を継続したい。

☆ポスト SGH, 他について

- ・国からの予算配分がなくなるという理由でこの取り組みを終えるのはよくない。地域の課題を地域の学校と協働し進める方向がよい。
- ・地域協働のもと、小中高大連携を目指してほしい。土浦一高出身で活躍している人材は豊富なはずだ。
- ・県内唯一のSGH校であることに誇りを持ち、県内をリードする存在であってほしい。



GBIC (課題研究発表会) に審査員として参加



GBIC ポスター発表でコメント



発表会後に運営指導委員会を開催